

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

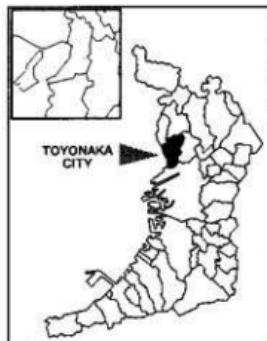
平成 6 (1994) 年度

平成 7 (1995) 年 3 月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 6 (1994) 年度



平成 7 (1995) 年 3 月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、戦後大都市に隣接するベットタウンとして、また交通の要衝として、近代的な都市へと発展し続けてまいりました。その発展の一方では、猪名川の豊かな流れと緑なす千里丘陵の中で育まれた自然が、そして太古より肥沃な大地に生活を営んだ先人たちの残した文化遺産が消え去ろうとしております。今日、新たなまちづくりが進むなか、郷土の歴史・文化・自然を生かしたより潤いのある生活を創造し、これから社会へ伝えていく責務は、より重要なものになるでしょう。

この報告書は、文化遺産の一つである埋蔵文化財の重要性をふまえ、豊中市が平成5年度事業として國ならびに大阪府の補助を受けて実施した本町遺跡の緊急発掘調査の概要を報告するものです。本町遺跡は、これまでの調査で古墳時代後期には桜井谷窯跡群の須恵器生産に関わる集落として、また奈良時代には金守山廃寺と関わりのある集落として、豊中の歴史を語るうえで重要な遺跡であることが判明しております。また、今回の報告におきましても、新たな知見が加えられることになりました。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導を賜り、土地所有者ならびに近隣の方々には文化財の重要性に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係各機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のひとかたならぬお力添えにより、豊中市の文化財保護行政を推進してまいりました。ここに厚くお礼申し上げると同時に今後のさらなるご支援をお願い申し上げます。

平成7年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 青木伊織

例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が平成6年度国庫補助事業(総額2,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%)として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度は、本町遺跡と曾根遺跡について平成6年4月4日から平成7年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。曾根遺跡については、平成7年度に概要報告を行うものとする。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は、下表に記すとおりである。
4. 本町遺跡第18次調査においては、店舗および共同住宅の営利事業部分を有しているため、延べ建築面積から専用住宅として個人が占有する面積を按分し、その部分について国庫補助費より調査費用を支出した。
5. 本書のうち、第II章(3)出土遺物を漁野しほが、第II章のその他は清水 篤が、また第I章および第III章は橋田正徳が執筆した。なお、本書全般に関わる編集については、橋田が行った。
6. 各調査地の表記においては、第VI座標系に基づく国土座標を用いた。また、各挿図の方方位のうち、M.N.は磁北をしめすもので、真北より6'40"西に傾き、またNは座標北をしめし、真北より17"西に傾く。
7. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。また、本書の作成にあたっては関係各位より、多くのご助力をいただきました。あわせてここに明記し、深謝いたします。

遺跡名	調査地	調査面積	担当者	調査期間
本町遺跡 18次	豊中市本町3丁目37、 37-1	m ² 260	清水 篤	平成6年4月4日～5月19日
本町遺跡 19次	豊中市本町9丁目 163-3	m ² 130.4	橋田正徳	平成6年6月6日～7月5日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境 1

第Ⅱ章 本町遺跡第18次調査の概要

1. 調査の経緯.....	3
2. 調査の概要.....	3
(1) 基本層序.....	3
(2) 検出した遺構.....	4
(3) 出土遺物.....	9
3. ま と め.....	12

第Ⅲ章 本町遺跡第19次調査の概要

1. 調査の経緯.....	13
2. 調査の概要.....	14
(1) 基本層序.....	14
(2) 検出した遺構.....	15
(3) 出土遺物.....	17
3. ま と め.....	18

挿図目次

第Ⅰ章 位置と環境

第1図 遺跡分布図..... 2

第Ⅱ章 本町遺跡第18次調査の概要

第2図 調査範囲図..... 3

第3図 調査地位置図..... 3

第4図 挖立柱建物..... 4

第5図 調査区平面図..... 5 ~ 6

第6図 溝1・溝2断面図..... 7

第三章 本町遺跡第19次調査の概要

第7図 土坑1平面・断面図	7
第8図 井戸1平面・断面図	8
第9図 出土遺物実測図(1)	10
第10図 出土遺物実測図(2)	11
第11図 調査範囲図	13
第12図 調査地位置図	13
第13図 調査区平面図	14
第14図 斜面堆積断面図	15
第15図 木棺墓平面・断面図	16
第16図 土坑平面・断面図	16
第17図 出土遺物実測図	17
第18図 参考資料 韓式土器	18

図版目次

図版1 本町遺跡第18次調査	(1) 調査区全景
図版2 本町遺跡第18次調査	(1) 挖立柱建物
	(2) 井戸1
図版3 本町遺跡第18次調査	(1) 土坑1遺物出土状況
	(2) 土坑2遺物出土状況
図版4 本町遺跡第18次調査 出土遺物	
図版5 本町遺跡第18次調査 出土遺物	
図版6 本町遺跡第19次調査	(1) 調査区東部全景
	(2) 調査区西部全景
図版7 本町遺跡第19次調査	(1) 斜面堆積状況
	(2) 木棺墓棺内検出状況
図版8 本町遺跡第19次調査	(1) 木棺墓完掘状況
	(2) 棺外木片出土状況
図版9 本町遺跡第19次調査 出土遺物	(1) 調査区出土遺物
	(2) 調査区出土遺物(韓式土器)
	(3) 参考資料 韓式土器

第Ⅰ章 位置と環境

位置 豊中市は、大阪府北西部に位置し、西は猪名川を介して兵庫県に接する。豊中市の地形を概観すると、北部から東部にかけては待兼山、島熊山などの丘陵と、これらから派生する高位段丘が広がり、中部に通称豊中台地と呼ばれる低位・中位段丘が、また南部および西部にかけては、縄文時代以後の猪名川等の沖積作用によって形成された沖積平野が、豊中台地を囲むように広がる。

なお、本町遺跡は、豊中市中央部の豊中台地北東部に位置する。詳しくは、台地の北端を流れる千里川南岸の低位・中位段丘上に立地する。

歴史的環境 本町遺跡では、今回の調査をあわせて19次の調査が行われている。これまでの調査では、当遺跡が縄文時代から中世の、特に弥生時代後期から終末期、古墳時代後期から奈良時代を中心とする複合集落遺跡として知られている。また、当遺跡南西に隣接する新免遺跡と時期的な動向に関連性があるとも指摘されている。

本町遺跡において、明確な集落が成立するのは弥生時代後期と考えられている。本町遺跡の集落が隣接する弥生時代中期からの拠点集落である新免遺跡から派生したのか、または別個に出現した集落なのかは不明であり、その出自については今後の課題となろう。弥生時代後期の集落は、弥生時代終末期の粘土採掘坑の存在からみて当該期まで継続する可能性はあるが、古墳時代前期から中期の集落関連遺構は検出されておらず、現段階でこの時期まで集落が継続する可能性を論じることは困難である。

再び、明確な集落が確認されるようになるのは、古墳時代後期になる。当遺跡の南西部および新免遺跡北東部では、大量の須恵器が出土する遺構群が検出されており、千里川上流の丘陵部に広がる桜井谷窯跡群における須恵器生産と関連する集団の存在が予想されている。

また、白鳳時代になると当遺跡東方に金寺山施寺が建立され、建立に伴って奈良時代には庵寺と何らかの関わりをもつと考えられる掘立柱建物群が、遺跡北中部を中心に集落の一部を構成するようになる。古墳時代後期に成立した集落は、奈良時代にかけて継続するが、現段階では平安時代末期までの集落関連遺構は確認されていない。

平安時代末から鎌倉時代にかけても集落の存在が認められるが、これらは少数の建物からなる建物群が点在する小集落の様相が予想される。

今後は、各時期における周辺の諸遺跡との関連や、遺跡内における集落の詳細な変遷などを明確にすることが課題となろう。

第1章 位置と環境



1. 野畠遺跡	13. 宝池遺跡	25. 長興寺跡	37. 挿引遺跡	49. 西御代吉古墳羣	61. 椿堂の坂遺跡
2. 野畠春日町遺跡	14. 麻田巣塗尾原	26. 嵐壁古墳群	38. 阿市町市道跡	50. 駒部遺跡	62. 利倉西遺跡
3. 少西遺跡	15. 霊池徑道跡	27. 大原古墳	39. 岸出道跡	51. 猪島北遺跡	63. 上津島川床遺跡
4. 内田遺跡	16. 南刀削川道跡	28. 開原子塚古墳	40. 原田遺跡	52. 高田元町遺跡	64. 上津島道跡
5. 片瀬山古墳	17. 菊池山古墳	29. 八天平原古墳	41. 分担道跡	53. 高田中町遺跡	65. 横筋ボンゾヘ遺跡
6. 片瀬山遺跡	18. 金寺山廃寺跡	30. 国町南側	42. 佐根家道跡	54. 佐根南遺跡	66. 上津島南道跡
7. 京奈遺跡	19. 新東宝山古墳群	31. 小石原古墳	43. 桐山遺跡	55. 稲荷道跡	67. 仙台遺跡
8. 板井谷窯跡群	20. 本町遺跡	32. 大石原古墳	44. 石藏寺跡	56. 稲荷村跡	68. 岩江遺跡
9. 上野遺跡	21. 斎免遺跡	33. 見附北遺跡	45. 若竹北遺跡	57. 駒部西遺跡	69. 庄内遺跡
10. 斎免遺跡	22. 下原北遺跡	34. 山ノ上遺跡	46. 小寺北遺跡	58. 利倉北遺跡	
11. 笠原北遺跡	23. 姶輪散在地	35. 止井遺跡	47. 北条遺跡	59. 利倉遺跡	
12. 宝池車道跡	24. 鶴原古墳	36. 諏訪西遺跡	48. 小分寺遺跡	60. 丹波南遺跡	

第1図 遺跡分布図 (1/50,000)

第II章 本町遺跡第18次調査の概要

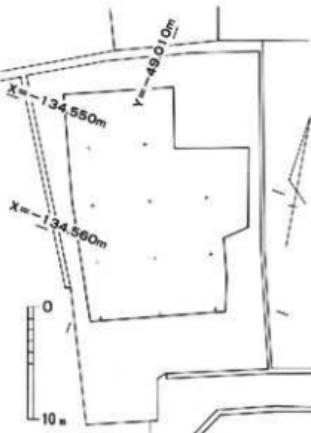
1. 調査の経緯

当該調査地点は、豊中市本町3丁目37、37-1番地に所在し、本町遺跡の範囲内に含まれる。共同住宅建築に伴って試掘調査を行なった結果、遺物包含層及び遺構が検出されたため、工事に先立って当該調査を行なう運びとなった。中詰建物には一部個人利用の施設が含まれており、この部分の占有面積を按分することによって国庫補助事業の対象とし、残存した費用を事業者の負担とすることで了解を得た。

2. 調査の概要

(1) 基本層序

当該調査地内の堆積土は、灰黄褐色系のシルトが基本となり、古墳時代の遺物包含層が黒褐色系の均質なシルトで構成される。遺構面のベースとなる堆積土は明黄褐色系のシルト～粘土で、洪積層の上部が露出したものと考えられ、調査地の北半部では拳大の礫が多く含まれる。



第2図 調査範囲図 (1 : 500)



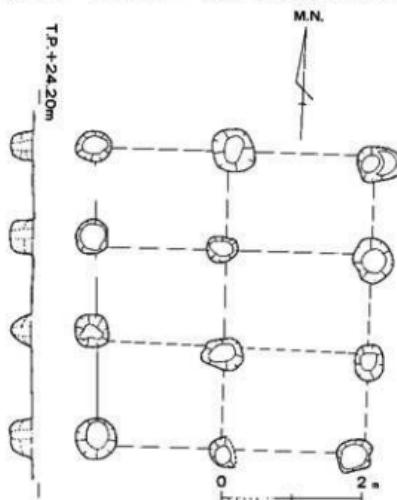
第3図 調査位置図 (1 : 5000)

この堆積層の上部は、付近で弥生～古墳時代の生活面として認識されているものである。また、堆積土の上部は近世以降の耕作や開発によって擾乱されるとともに水平に敷均られ、再堆積したものと考えられる。したがって包含される遺物にも多様なものが混入しており、各々の堆積層の時期を明確にはできなかった。

(2) 検出した遺構

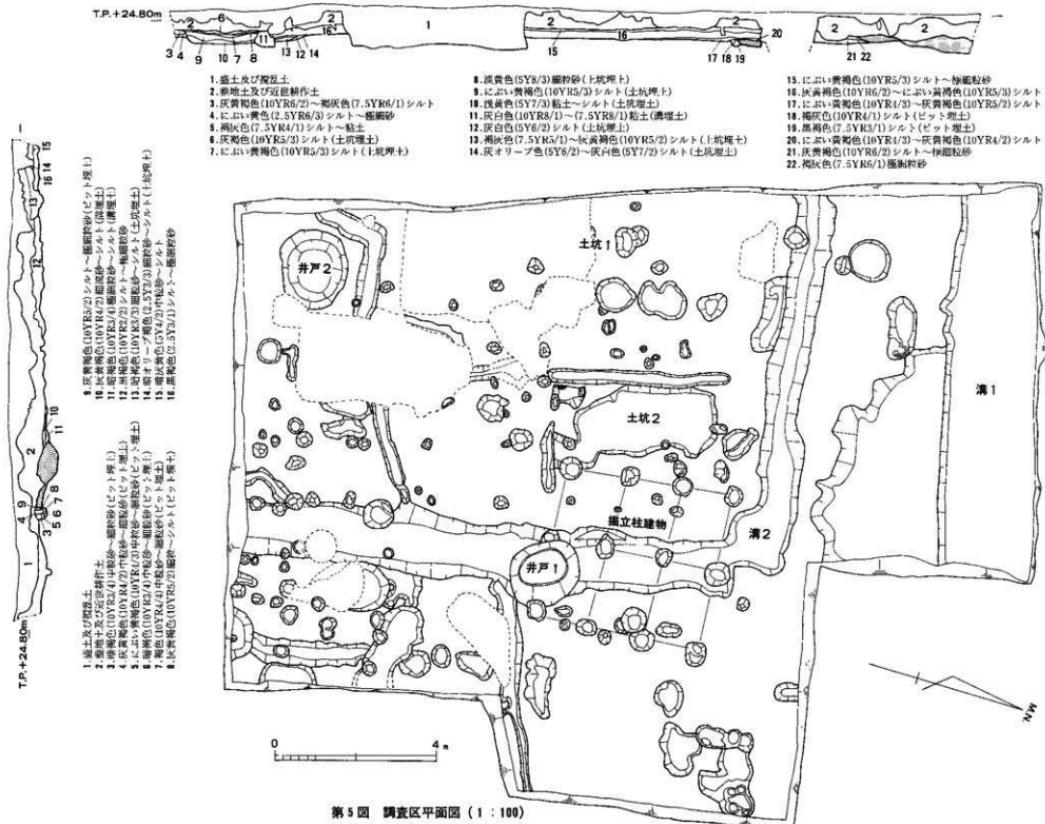
今回の調査では、近世以降の開発が著しく、永らく耕作地として利用されてきたにもかかわらず、多数の遺構を検出した。その内訳はピット（明確な柱穴を含む）が110基、土坑20基、溝10条、井戸4基である。ただし、樹木の根によって擾乱、土壤化した部分が本来の遺構との識別を非常に困難にしており、これらの検出遺構数には、人為的に構築された遺構ではないものも若干含まれている可能性がある。また遺構は、概ね6世紀の前半を中心とした時期と、中世以降の時期のものに区分される。以下にその概要を記していく。

ピット 調査地内では様々な形状と深度のピットが検出された。これらの中で南半部に集中して検出されたものは、直径約40cm内外、深さ約50cm程度で比較的規模がそろっているにもかかわらず、平面プランを明らかにはできなかった。また、後述する講2に並行して二列のピットが南北方向に検出されたが、これらについても上部の構造物を明らかにすることはできなかった。検出されたピットの時期は、出土遺物が希少であったことから明確ではないが、溝2と重複しているものについては、6世紀後半以降の年代が与えられる。



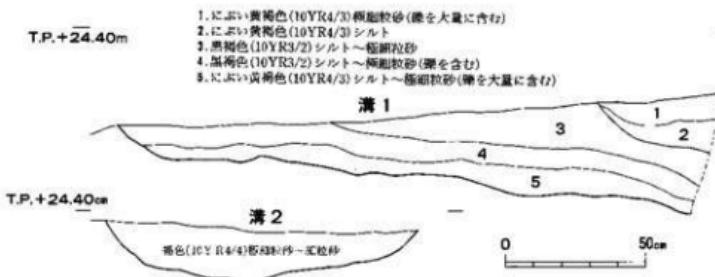
第4図 摂立柱建物 (1:80)

摂立柱建物 上述したピット群の中で1～12までは桁行3間、梁行2間の摂立柱建物を構成する柱穴群である。柱穴は各々一辺約50cm程度の隅丸方形の平面プランを持ち、遺存した深さは約40cm前後を測る。柱痕は數個所で認められ、直径約10cmを測る。遺存していた柱痕や柱穴の配置から復元される桁行柱間は約1.4m、梁行柱間は約1.8m程度となる。この建物は溝2が埋没した直後に建築されており、柱穴埋土からは時期決定に有効な遺物が出土していないものの、古墳時代後期～奈良時代にかけての時期を与えることができる。また、周辺での既往の調査で検出された該期の建物とは、平面ア



第5図 調査区平面図 (1:100)

※断面図中のアミ部分は溝1・2埋土

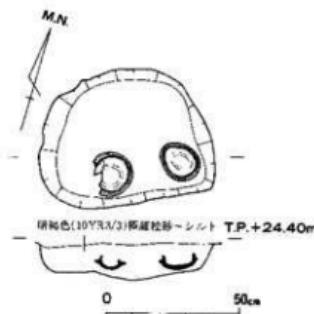


第6図 溝1・溝2断面図(1:20)

ラン、規模等において同様であることからも建築時期の蓋然性が高まるものと考えられる。なお、建物の長軸はほぼ磁北方向を指向している。

溝 今回の調査地内で検出された溝は、溝1、溝2を除いてすべて中世以降に当該地域が耕地化してから掘削された、耕作に伴うものである。調査地の北端部で検出された溝1は、幅約2m、遺存した深さ約30cmを測る。褐灰色系のシルトが堆積しており、ベース上に含まれる礫が比較的多く混入している。堀土下層では須恵器のみが出土しているので、この溝が機能していたのは古墳時代後期であることが確実である。ただし、北側の肩部が調査地外であることから、溝以外の遺構である可能性も考えられる。溝1はその後の耕作地化に伴って、整地されて埋没するが、そのくぼみを利用して近世にも溝が再掘削されている。溝2は幅約1.5m、遺存した深さ約30cmを測る。堆積土の土質や上部が削平されている様子などは溝1と同様である。しかし、平面プランは非常に特徴的で、調査地の中央をL字形に縦断している。その内側に顯著な遺構が認められないものの、後述するように須恵器を埋納した土坑などが検出されていることから、集落等を意図的に区画していた溝であろうと考えられる。

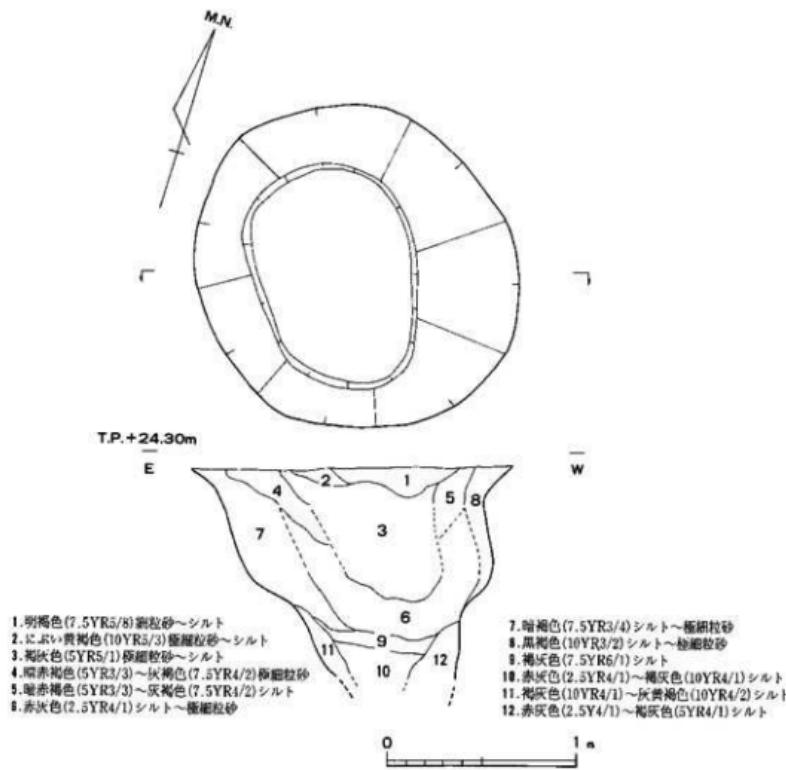
土坑 ここに記す土坑とは、前述したピットと比較して、若干大型で浅いという点を除けば明確な基準で区分されているわけではない。遺構の機能はもちろんのこと、遺物が出土しなかったものについては時期も明確ではない。ただし、以下の土坑のように黒褐色系の堀土であれば古墳時代に該当する可能性が高い。土坑1は楕円形で幅約70cm、遺存した深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色系のシルト～細粒砂で、底部付近に須恵器の杯身2点が埋置されていた。土坑2は後世の削平や樹木の根による擾乱が著しく、円状を保っていない。



第7図 土坑1平面・断面図

ものと考えられる。現状では短辺約1.5m、長辺約3.5mの長方形で、遺存した深さ約10cmを測る。ここでも埋土は黒褐色系のシルトで、須恵器の杯身や甕の胴部などが出土地している。これらの土坑については、何らかの祭祀的な行為が行なわれた痕跡として捉えることが可能である。また、包含層中ではあるが調査地内から玉類も出土していて、この推測を裏付ける資料となり得る。

井戸 調査地内の井戸はほとんどが素掘りで、かなりの深度に達している。比較的新しい時期まで利用されていたことが判明しているが、井戸1と井戸2は掘削された時期が他のものにくらべて若干遅る可能性がある。井戸2からは、本町遺跡の北側に隣接して位置し、白鳳期に建立されたとされる金寺山庵寺特有の平瓦が出土している。



第8図 井戸1平面・断面図 (1:30)

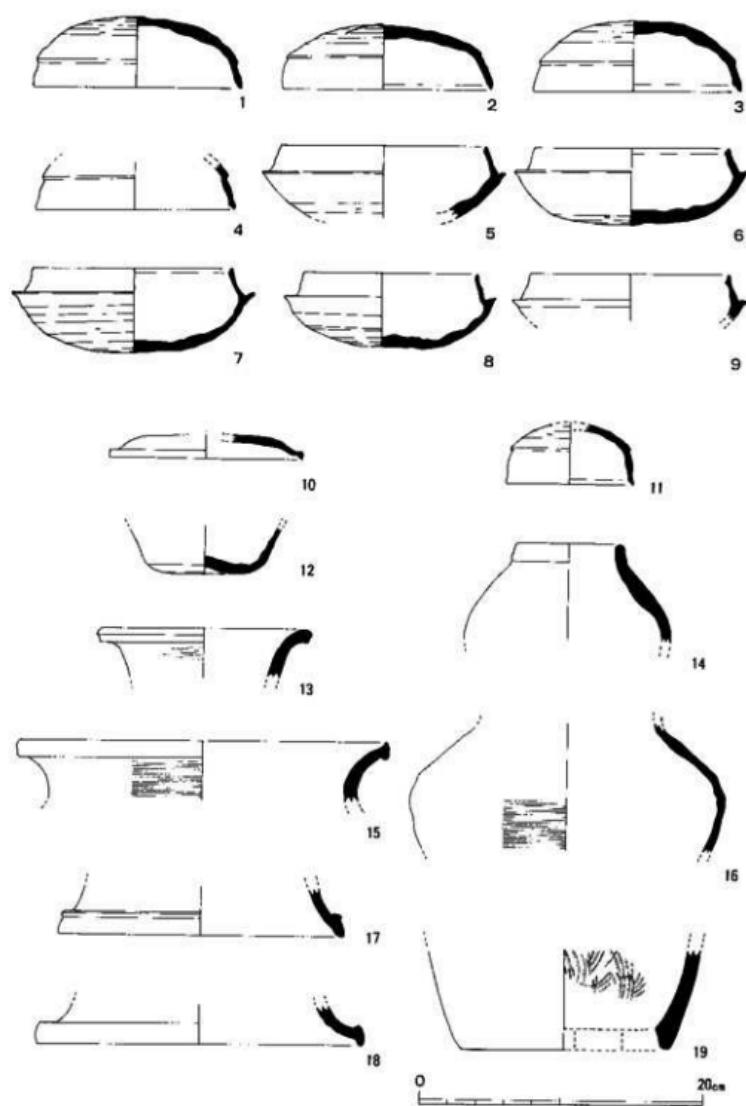
(3) 出土遺物

須恵器（第9図） 1～3、5、6、19は調査区中央部の土坑2から出土したものである。蓋杯については口縁部径14cm程度、器高4.5cm程度を測る。1～3は杯蓋で、天井部域の約2分の1に回転ヘラケズリが施されている。3の口縁端部内面に浅い凹線が認められる。2は焼け歪んでいる。天井部に「×」のヘラ記号が残存している。このほか口縁端部内面に明瞭な凹線が見られる。5、6は杯身で5の体部下半の約3分の1に回転ヘラケズリが施されている。たちあがり高は2cmで、たちあがりの基部には明瞭な沈線が見られる。6は完形であるがかなり焼け歪んでいる。外面の体部下半の約4分の1にヘラケズリが施されている。口縁端部内面には浅い凹線が見られる。19は幅で復元底部径14.5cm、残存高6.9cm。内面には同心円タタキが残る。底部の穿孔の数、形は残存部分が少ないので明確ではないが、中央とその周囲に5箇所の穿孔がなされていたと考える。穿孔部分の形状は中央に向かって幅が狭くなる台形で、左右の辺がややふくらみを持っていたと考えられる。7、8は土坑1の底部付近に埋置されていた杯身である。口縁径12cm～14cm、器高5cm程度ではほぼ完形だが若干焼け歪んでいる。体部下半の約2分の1に丁寧なヘラケズリが施されており、両者とも比較的丁寧な調整が行われている。7の外面は受部から体部上半にかけて強いナデが施されている。口縁端部内面には明瞭な凹線が残る。

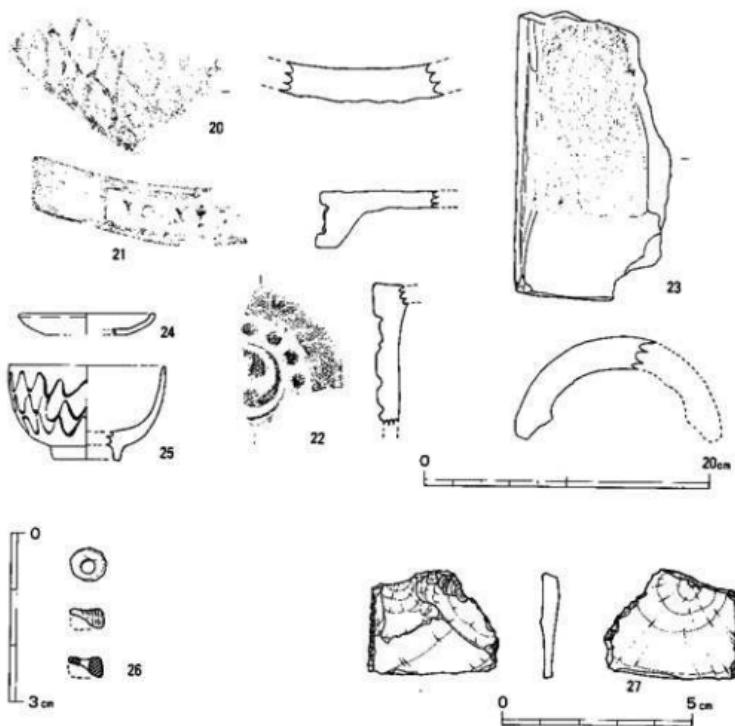
4、9、12、14、18は溝1から出土したものである。4、9は杯蓋と杯身で口縁径13.9cm、残存高3.3cmを測る。4は稜線の部分が非常にシャープに仕上がっている。また口縁端部に浅い凹線が見られるが、途中で消失する。9はたちあがり高が2cmで受部は水平に伸びる。口縁端部内面には明瞭な凹線が残る。12は杯身で、復元口径10.6cm、残存高3cmを測る。体部外面はナデ調整であるが、底部付近は未調整である。内外面ともに自然釉が付着している。14は短頸壺の口縁部で復元口径7.2cm、残存高6.3cmを測る。内外ともにナデ調整である。角張らない緩やかな肩部を有する。

13、17は溝2から出土したものである。13は小型壺の口縁部と考えられる。復元口径14.3cm、残存高3.4cmを測る。内外面ともに著しく摩滅しているが、外面にはわずかにカキメ調整が認められる。

11はピットから出土したもので短頸壺の蓋と考えられる。復元口径8.9cm、残存高4.2cmを測る。天井部域の約3分の2にヘラケズリが施されている。10は杯蓋で復元口径13.4cm、残存高1.7cmを測る。内外面ともに回転ナデが施され、陶邑編年のIV型式3段階に該当する。遺構出土の須恵器は概ね、陶邑編年のII型式第1段階に該当するもので、6世紀前半代の時期を与えることができる。包含層の土器には一部10の時期に該当するものを含んでおり、遺構群の中には当該時期に營まれたものもあることがわかる。



第9図 出土遺物実測図(1)



第10図 出土遺物実測図(2)

その他の遺物（第10図） 井戸2から出土した20の平瓦は裏面に斜格子の叩き目を残すことから金寺山廃寺出土瓦と同型式であり、白鳳期の平瓦に比定される。21の軒平瓦は瓦当面の右端部を欠損している。残存長8.4cm、内区厚さ2.5cm、外区厚さ0.6cmを測る。凹面はナデ調整を施し、布目痕が周縁外面に残る。22は三巴文軒丸瓦の瓦当部分である。外縁幅2.4cm、外縁高0.4cmを測る。瓦当面内区の文様は右回りの三巴文で比較的明瞭に頭部と尾部が区別できる。23は丸瓦の広端縁部分で、凹面には粗い布の痕跡が残る。側部凹面側縁、凸面は磨かれている。24は中世以降と推定される土師皿で復元口径9.4cm、残存高1.5cmを測る。口縁端部外面には面取りが見られる。25は肥前陶磁の丸碗で復元口径9.4cm、器高6.7cmを測る。内外全面施釉したのち、高台部分に釉剥ぎを施す。染付文様は一重の網手文が施される。26は碧玉製の円玉である。27は二次加工のある剝片である。側縁にスクレイパー的な刃部を形成している。

3. ま と め

以上に概述してきたように今回の調査地点においても、周辺における既往の調査成果と同様、貴重な資料を得ることができた。

まず、須恵器生産に関連した遺構群であるが、当該調査で検出された土坑群などは、桜井谷窯跡群との地理的な関係から本町遺跡周辺が特殊な集落として位置づけられていた証左とみることができる。千里川水系を利用した搬出経路から推測すれば、本町遺跡はその拠点となることは確実であろう。こういった観点から考えれば、祭祀行為に伴った遺構や遺物の出土、特に玉類や土馬が本町遺跡や隣接する新免遺跡から相次いで出土することも首肯できる。今回の調査では、溝2によって区画された部分がどのように利用されていたのかについて明らかにすることができなかつたが、周辺での今後の調査に期待したい。

次に掘立柱建物を中心とした集落の展開であるが、当該調査でも確認されたようにこうした建物が奈良時代までは継続していくことが確実である。本町遺跡周辺では中世に入ると大規模な農耕化がなされ、建物や集落の遺構が検出されるることは少ない。当該調査でも中世の掘立柱建物は検出されなかったことから、この時期を境にして周辺が耕地化し、集落の中心が移動したことが知られる。その後、近代に至るまで遺跡周辺には牧歌的な農村風景が広がることになるのである。ただし、洪積台地上に立地するため、水の確保には苦労したようで、井戸をあちこちに掘削することによって水源を得ていたことが調査によって裏付けられている。

最後に井戸から出土した金寺廬寺出土瓦と同型式の瓦について触れておきたい。既往の調査でも、本町遺跡に隣接した新免遺跡や、低湿地であり距離的にも遠い穂積遺跡、豊島北遺跡などからこうした瓦が若干ではあるが出土している。非常に断片的な資料であるため、詳細は不明であるが、金寺山の寺院が廃絶してから当時では貴重であった屋根瓦だけを移動し、再利用していたのではないかと考えられる。どのような建物にいつ頃利用したのかなどの問題があり、今後の資料の増加を待って検討する必要があろう。

第III章 本町遺跡第19次調査の概要

1. 調査の経緯

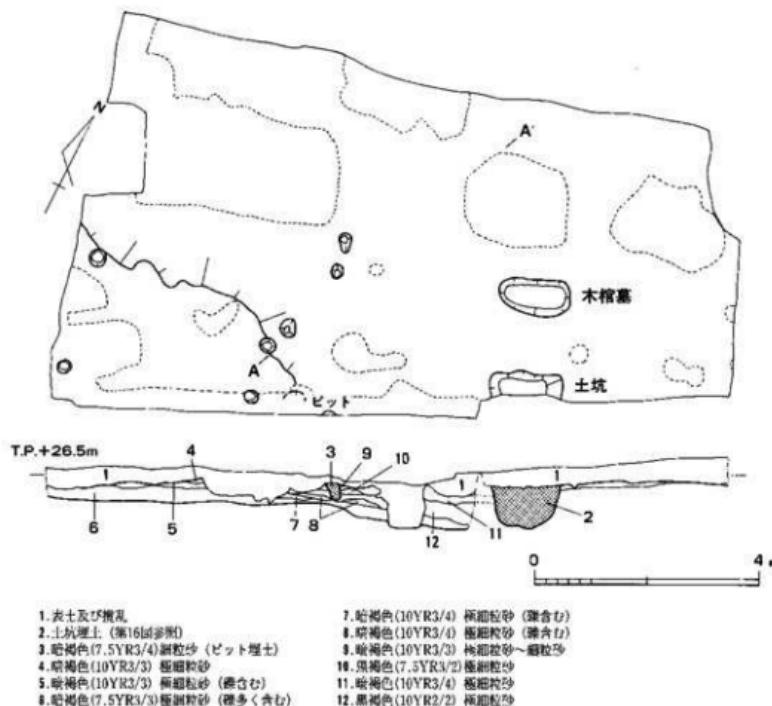
調査地は、本町9丁目163-3に所在する。専用住宅新築に伴う建築確認申請の提出に基づき、建築予定地において立会調査を行ったところ、柱穴等の遺構が存在することを確認した。よって、着工に先立ち1994年6月6日より7月5日の日程で、建築範囲となる130.4m²を対象に、本調査を行った。



第11図 調査範囲図



第12図 調査地位置図 (1:5,000)



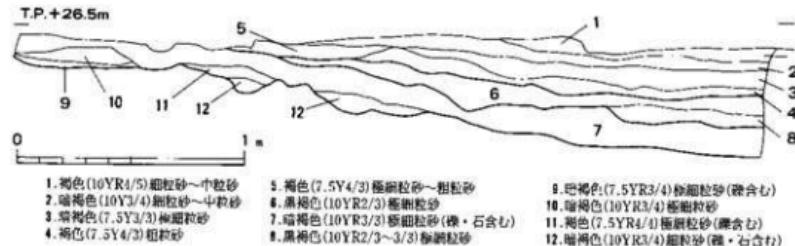
第13図 調査区平面図 (1 : 100)

2. 調査の成果

(1) 基本層序

調査地は、中位段丘斜面の中位に位置し、旧地形が調査区南西隅から北方および東方に落ち込むため、現在の地表面から地山となる黄褐色砂礫層までの層序は一様ではない。なお、調査区の北部および東部においては、地山は検出できなかった。

調査区南西部における層序は、表土・暗褐色極細粒砂層 (雜を多く含む)・黄褐色砂礫層 (地山) となるが、調査区北部では第14図の斜面堆積断面図にしめすように、表土から地山の間に7層の堆積が認められる。第1～3層は褐色中粒砂を主たる堆積土とし、第2層に少量の瓦器細片が含まれている。第4・5層は褐色粗粒砂を堆積土とする。第6・8層は湿地などに堆積するような黒褐色極細粒砂を主たる堆積土とする。礫・石は含むが、極少量である。このうち



第14図 斜面堆積断面図（1:25）

第6層からは第17図にあげた弥生時代後期と古墳時代後期の土器および韓式土器（第17図11・12）などが出土している。第7層他は暗褐色極細粒砂を堆積土とするが、礫・石を非常に多く含む。同層に含まれている礫・石は、段丘を構成する礫層が母材となるものと考えられる。なお、同層からは極少量ではあるが、古墳時代後期の遺物が出土している。

以上より、当調査地における段丘斜面の堆積は、古墳時代後期頃の段丘斜面および段丘縁辺部の崩壊はじまり、その後、土層の変化からうかがえるように堆積の様相を変えつつ、断続的に中世の段階まで堆積したものと考えられる。

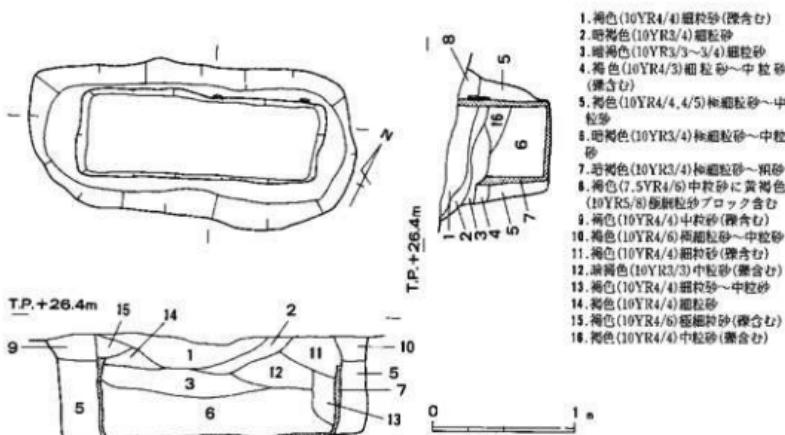
(2) 検出した遺構

当調査区からは、木棺墓1基、土坑1基、ピット7基を検出した。これらの遺構は、表土直下の褐色中粒砂層および暗褐色極細粒砂層直上にて検出したものである。なお、ピットのうち、SP-1, 2は古墳時代後期以降に、その他のピットは褐色中粒砂層直上面から掘り込まれていることから中世以降と考えられる。

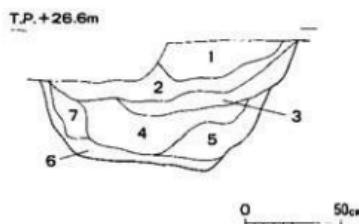
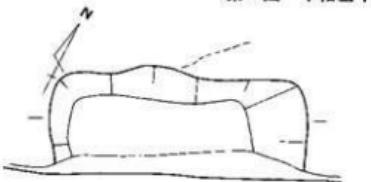
木棺墓 調査区西部にて検出した。墓壙の平面形は橢円形で、長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.4mをはかる。墓壙内に棺材の固定に用いられたと考えられる木片が残存することや、土層断面の観察で棺の痕跡が明瞭に認められたことから、木棺墓と判断した。また、木棺墓の主軸方向は略東西であるが、遺体が残存していないため頭位は不明である。

木棺は、すでに腐朽しており、その構造は明確にはできないが、棺の痕跡から長軸0.8m、短軸0.3m程度の大きさであったと考えられる。また、北側の側板の外側中央と北東隅から側板の安定を補うために用いたと考えられる木片が出土していることから、木棺が遺体の搬送に用いられた棺ではなく、あらかじめ墓壙内に設置されていたものと判断できる。

木棺墓からは木片2点以外に出土遺物はなく、木棺墓の時期は不明である。ただ、木片の残存状態が非常に良好であることを加味すると、木棺墓の時期が江戸時代以前となる可能性は極めて乏しいと言える。



第15図 木棺墓平面・断面図 (1 : 20)



- 暗褐色(10YR3/4)極細粒砂～中粒砂
1. 黒褐色(10YR2/3)極細粒砂ブロック含む
3. 噴褐色(10YR3/4)粗粒砂～粗粒砂(深含む)
4. 暗褐色(10YR3/3)粗粒砂～粗粒砂
5. 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂～粗粒砂(深含む)
6. 噴褐色(10YR3/3)極細粒砂～中粒砂(深含む)
7. 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂に黒褐色(10YR2/3)極細粒砂ブロック混入

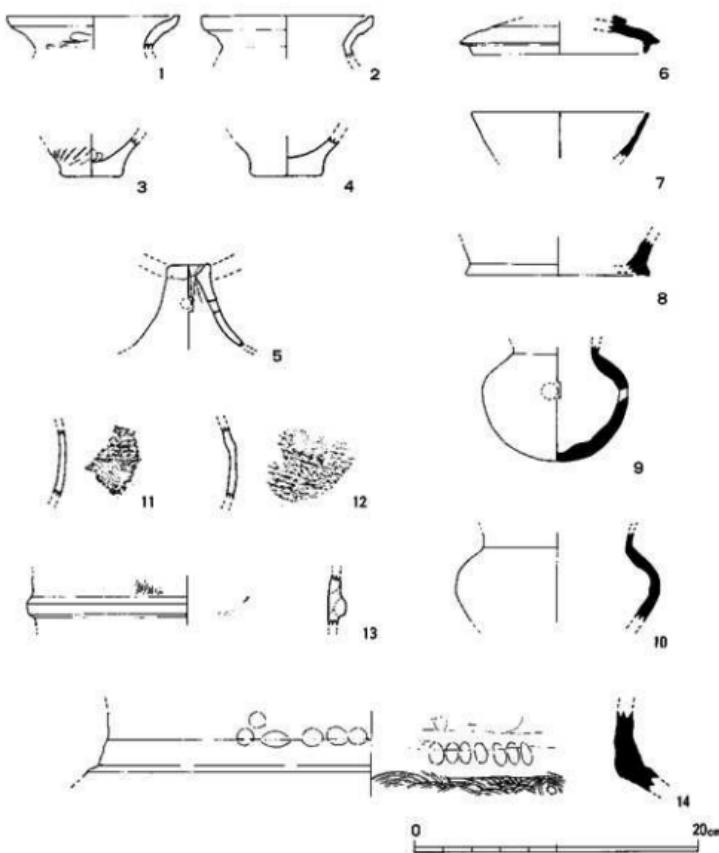
第16図 土坑平面・断面図 (1 : 30)

土坑 調査区西部南側で検出したが、土坑の南側は調査区の外へ伸びるため、正確な規模や平面形などについては明確にはできないが、検出した部分から東西の長さ1.3m、深さ0.7m程度の土坑と推定できる。

土坑の某底部は平坦ではなく、また土層断面の観察においても棺の痕跡などは確認されていないことから、土葬墓となる可能性は乏しく、その性格については不明である。

また、出土した遺物についても、すべて斜面堆積層内の遺物が混入したものと考えられるところから、厳密な時期についても不明と言わざるを得ない。

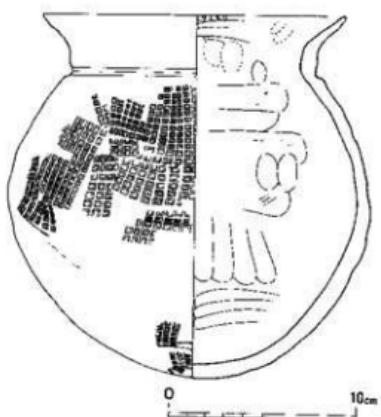
ただ、土坑が木棺墓の南側1 mに位置すること、また検出した部分から推定できる主軸方向が木棺墓とほぼ同一であることから、位置関係の点だけではあるが、木棺墓との関連について留意されよう。



第17図 出土遺物実測図 (1 : 4)

(3) 出土遺物

当調査区の遺物のほとんどは、斜面堆積土から出土したものである。遺構から出土した遺物は少なく、そのほとんどが細片で図化できるものはなかった。第17図にあげた遺物のうち、3は土坑から出土しているが、本来は斜面堆積土中にあったと考えられる。ちなみに、第17図の4は斜面堆積第2層から、1・2・5・7・8・10・11・12・13は斜面堆積第5層から出土した。なお、6・9・14は遺構面精査時に出土したものだが、これらも斜面堆積土中の遺物に含まれる。



第18図 参考資料 韩式土器（1：3）
（本町遺跡第2次調査 SD-3出土）

器壁の厚さは4～5mmである。体部外面に格子目の叩き痕が認められる。また、内面にはヘラけずりを施している。第18図に参考資料としてあげた、本町遺跡第2次調査 SD-3出土の韓式土器よりも、器壁が薄手であり、叩き痕の格子目も細かい。13は円筒埴輪である。タガは摩耗し原状をとどめていない。また、残存する部分もわずかで、二次調整の有無も明確ではない。14は須恵器大甕の頸部で、頸部径は推定で36.5cmをかる。

なお、2次調査で出土した韓式土器は、口径が16.4cm、器高が19.5cmをかる丸底の甕である。口縁部にはよこなでを施し、体部との境界に明確な段が形成される。体部外面には格子目の叩き痕が、内面にはヘラけずりが施されている。器壁は、6～8mmと厚みがある。今回の調査で出土したものと比較すると、やや粗雑なところが相違点となる。

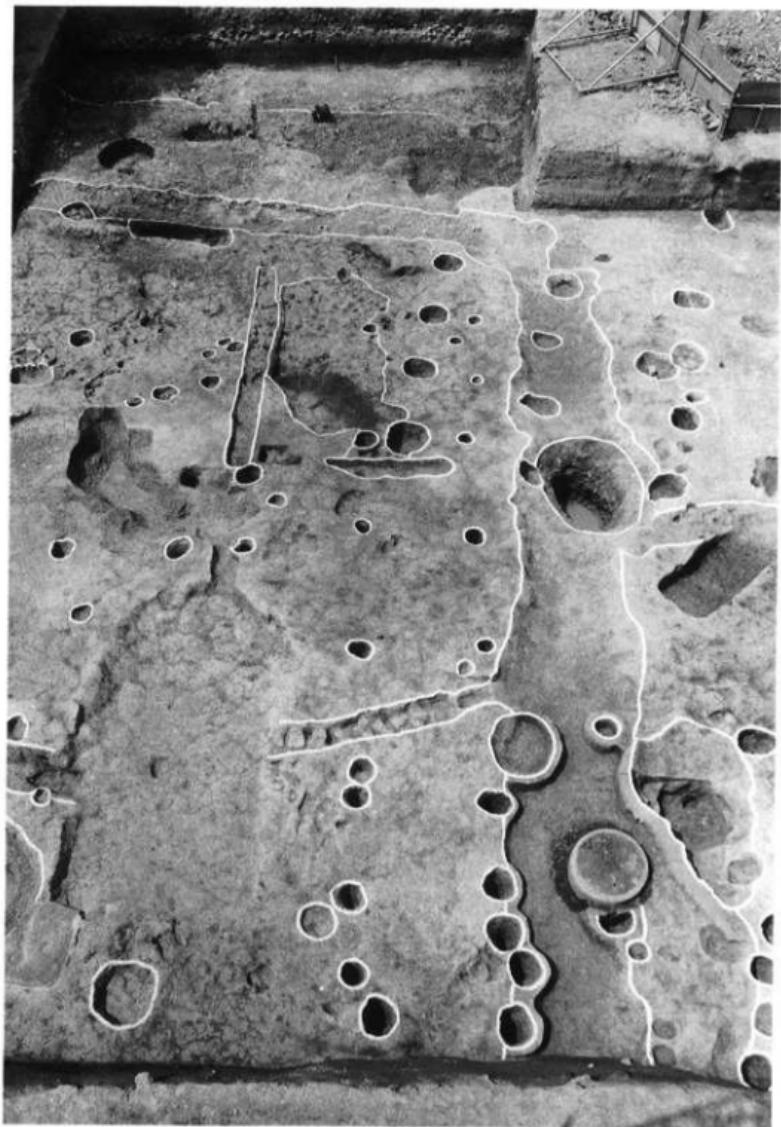
3. まとめ

今回の調査において、当初予想された弥生時代後期および古墳時代後期の明確な遺構は確認されなかつたが、近世以降の木棺墓を検出するなどの様々な成果を得た。弥生時代後期および古墳時代後期の集落は、当調査区よりも南方の丘陵平垣部に立地することが予想される。

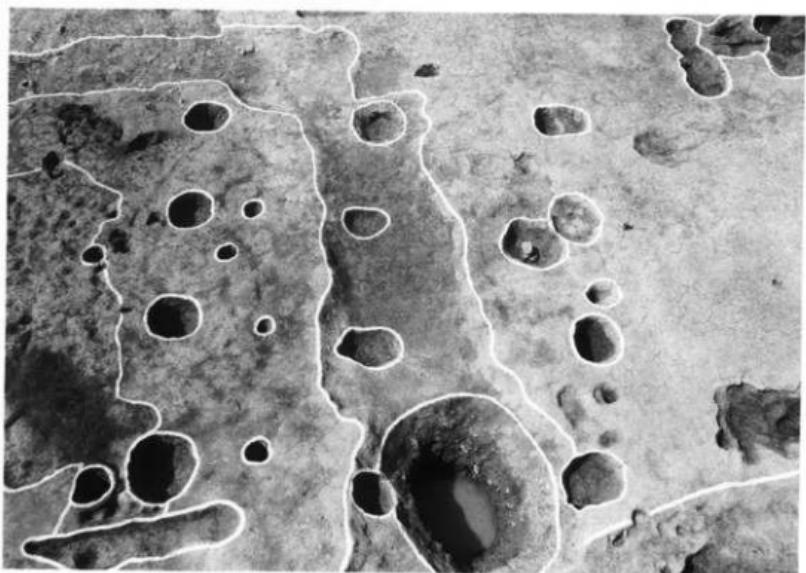
ところで、今回の調査では丘陵斜面の堆積状況が明らかになったが、堆積の状況や堆積土の様相から、丘陵周辺の自然環境に大きな変化があったことが予想されよう。丘陵周辺の自然環境は、丘陵上に立地する集落の展開と関連することから、その変化を復元することは各時代における集落の状況を、より明確にする手掛かりとなろう。

1・2は甕の口縁部で、口径はともに推定で12cmをかる。3・4は甕の底部である。3の底部径は推定で3.7cm、4は推定で4.7cmをかる。5は高杯の脚部で、上端部外面に杯部との接合痕がある。6は須恵器蓋で、其基部径は推定で12.6cmをかる。外面に別個体の破片が接着している。7は須恵器杯で、口径は推定で12.6cmをかる。8は須恵器壺で、高台径は推定で12.6cmをかる。9は須恵器甕で、体部最大径は推定で10.3cmをかる。10は須恵器短頸甕で、体部最大径は14.3cmをかる。11と12は、韓式土器の甕体部の一部と考えられる。細片のため、その概要は明確にはできないが、

図 版



(1) 調査区全景



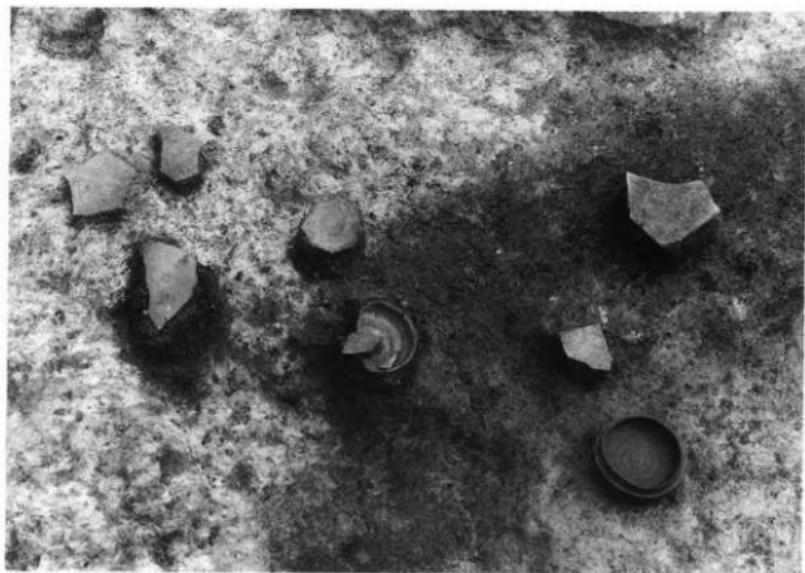
(1) 挖立柱建物



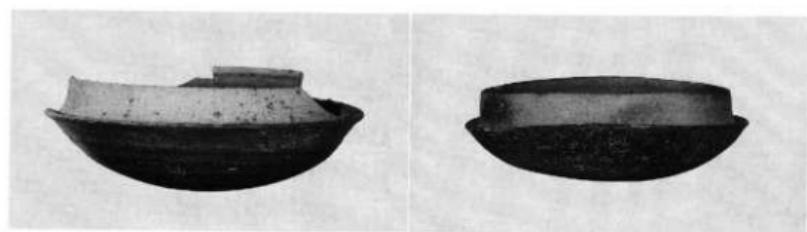
(2) 井戸 1



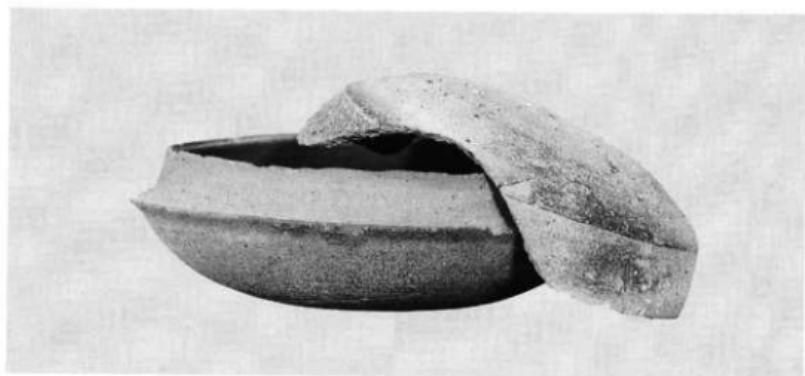
(1) 土坑1 土器出土状況



(2) 土坑2 土器出土状況



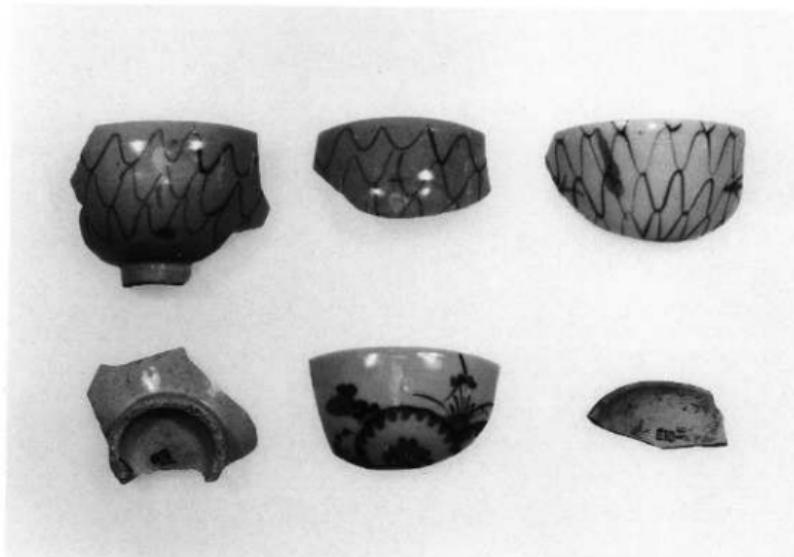
(1) 土坑1 出土遺物 (第9図-7・8)



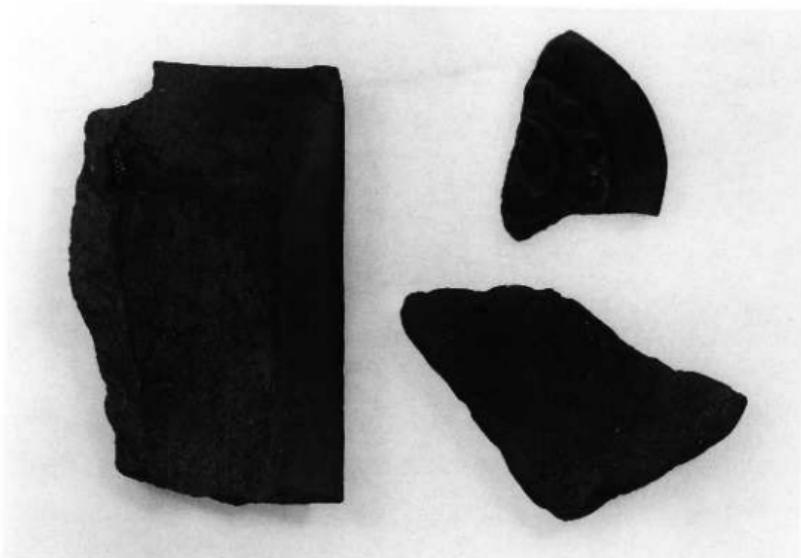
(2) 土坑2 出土遺物 (第9図-2・6)



(3) 軒平瓦 (第10図-21)



(1) 中・近世出土遺物（第10図）



(2) 瓦類（第10図）



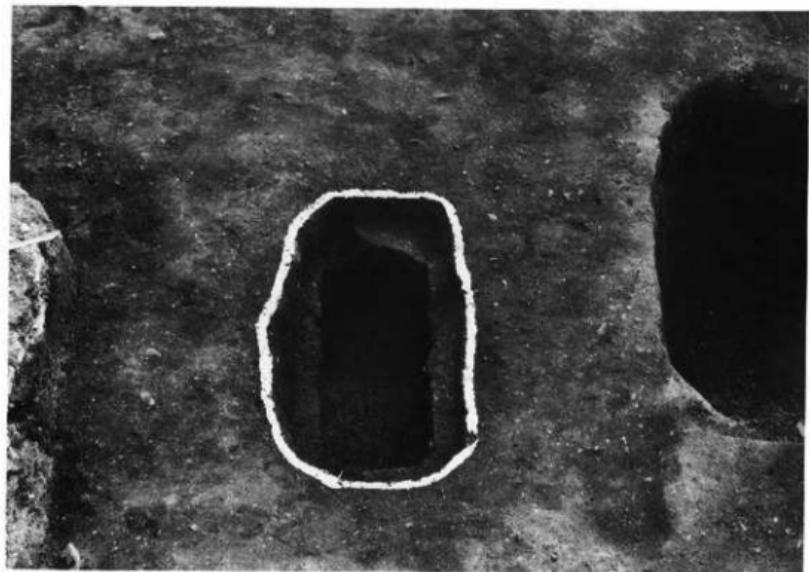
(1) 調査区東部全景



(2) 調査区西部全景



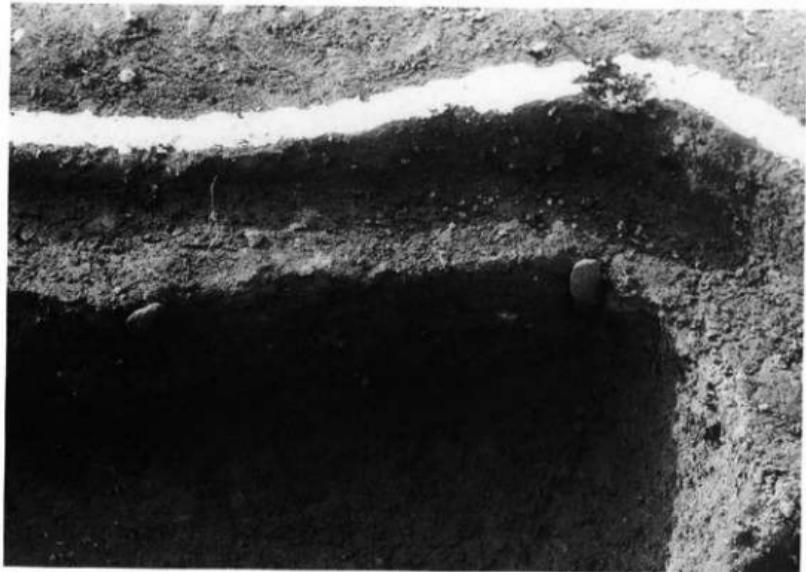
(1) 斜面堆積状況



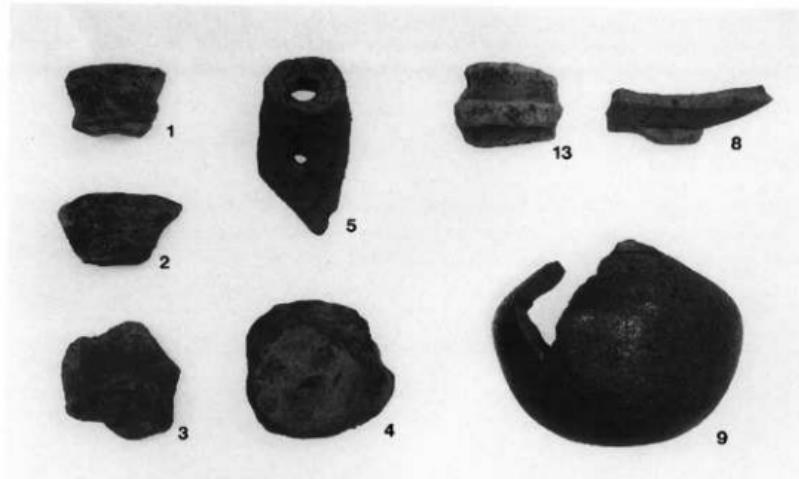
(2) 木棺基 棺内検出状況



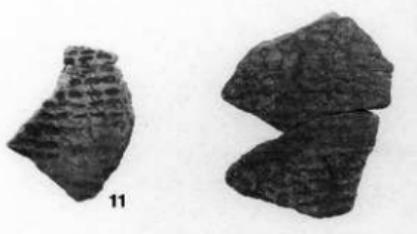
(1) 木棺墓完掘状況



(2) 棺外木片検出状況



(1) 調査区出土遺物
(第17図)



(2) 調査区出土遺物 韓式土器
(第17図)



(3) 参考資料 韓式土器 (第18図)
(本町遺跡 第2次調査 SD-3出土)

報告書抄録

所 収 遺 跡 木町（ほんまち）遺跡

調査期間 第18次調査 940404～0519 第19次調査 940606～0705

調査面積 第18次調査 260m² 第19次調査 130.4m²

調査原因 第18次調査 専用住宅

第19次調査 共同住宅兼専用住宅

遺跡の所在 奈中市木町2・3・4・5丁目周辺

北緯 34°47'30"

東経 133°27'45"

遺跡の種別 集落

遺跡の時代 弥生時代・古墳時代～奈良時代・平安時代・鎌倉時代

主要な造構 第18次調査 据立住建物 方形区画溝

第19次調査 木棺墓 土坑

特記事項 当該遺跡では、古墳時代後期には、千里川上流の桜井谷窯跡群と関連するものと考えられる遺構が検出されている。奈良時代の建物は、金守山廃寺と関連するものと考えられる。

豊中市文化財調査報告第34集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成7（1995）年3月

発行 豊中市教育委員会
豊中市中桜塚3丁目1-1
編集 社会教育課文化財保護係
印刷 やまかつ株式会社